

北海道の近代化の
歴史がわかる

空知・室蘭・小樽を結ぶ
地域の物語「炭鉄港」が
日本遺産になりました



 **日本遺産**
JAPAN HERITAGE

もっと知りたい！「炭鉄港」
「炭鉄港」をめぐるための情報を
発信している施設

そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター〈岩見沢〉

昔、炭鉱のまちで商売していた行商人に商品をおろしていた店を利用して、炭鉱遺産や観光情報を発信しています。炭鉱で働いていた人たちから寄贈された本や資料を見る



ことができ、「炭鉄港」をつなげるためのイベントや展示会も企画しています。

◆岩見沢市1条西4丁目3
◇TEL:0126-24-9901

赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設〈赤平〉

炭鉱で使われていた道具や図面、生活用品約200点を展示している施設。実際に炭鉱で働いていた方の解説を聞きながら、旧住友赤平炭鉱立坑やぐらや炭鉱関連施設内を見学できるガイドツアーが見どころです。



◆赤平市字赤平485
◇TEL:0125-74-6505

夕張市石炭博物館〈夕張〉

旧北炭夕張炭鉱で使われていた施設を利用した博物館。敷地内には夕張の石炭大露頭、天龍坑坑口あとなどもあります。明治時代に実際に使われていた「模擬坑道」は、現在、見学できません。



◆夕張市高松7-1
◇TEL:0123-52-5500

三笠鉄道記念館〈三笠〉

幌内鉄道で実際に使われていた時刻表や制服、鉄道資料などを展示しています。また、巨大ジオラマを走る模型の運転をはじめ、国内で最後まで現役で働いた蒸気機関車に乗ることもできます。



◆三笠市幌内町2丁目287
◇TEL:01267-3-1123

三笠市立博物館〈三笠〉

1000点を超える貴重な化石を展示している博物館。空知集治監の資料をはじめ、炭鉱のまちとして栄えた当時を伝える歴史資料も展示しています。



◆三笠市幾春列錦町1丁目212-1
◇TEL:01267-6-7545

星の降る里百年記念館〈芦別〉

かつて17の炭鉱があり、石炭産業で栄えた芦別。館内には、炭鉱関連の資料が展示され、当時の炭鉱長屋の暮らしぶりを映像で見ることがもできます。



◆芦別市北4条東1丁目1-3
◇TEL:0124-24-2121

室蘭観光協会〈室蘭〉

歴史的な建物である旧室蘭駅舎を利用した観光協会。市内各地の施設やイベント情報などを発信しています。建物の横には、昔、道内を走っていたSLも展示されています。



◆室蘭市海岸町1-5-1
◇TEL:0143-23-0102

運河プラザ〈小樽〉

歴史的建造物である旧小樽倉庫を利用している小樽市観光物産プラザ。英語・中国語・韓国語を話せるスタッフが常駐し、小樽・後志エリアのパフレットや外国語版マップなども豊富に取り揃えています。



◆小樽市色内2丁目1-20
◇TEL:0134-33-1661



令和元年度文化芸術振興費補助金(地域文化財総合活用推進事業)

発行: 2025年8月

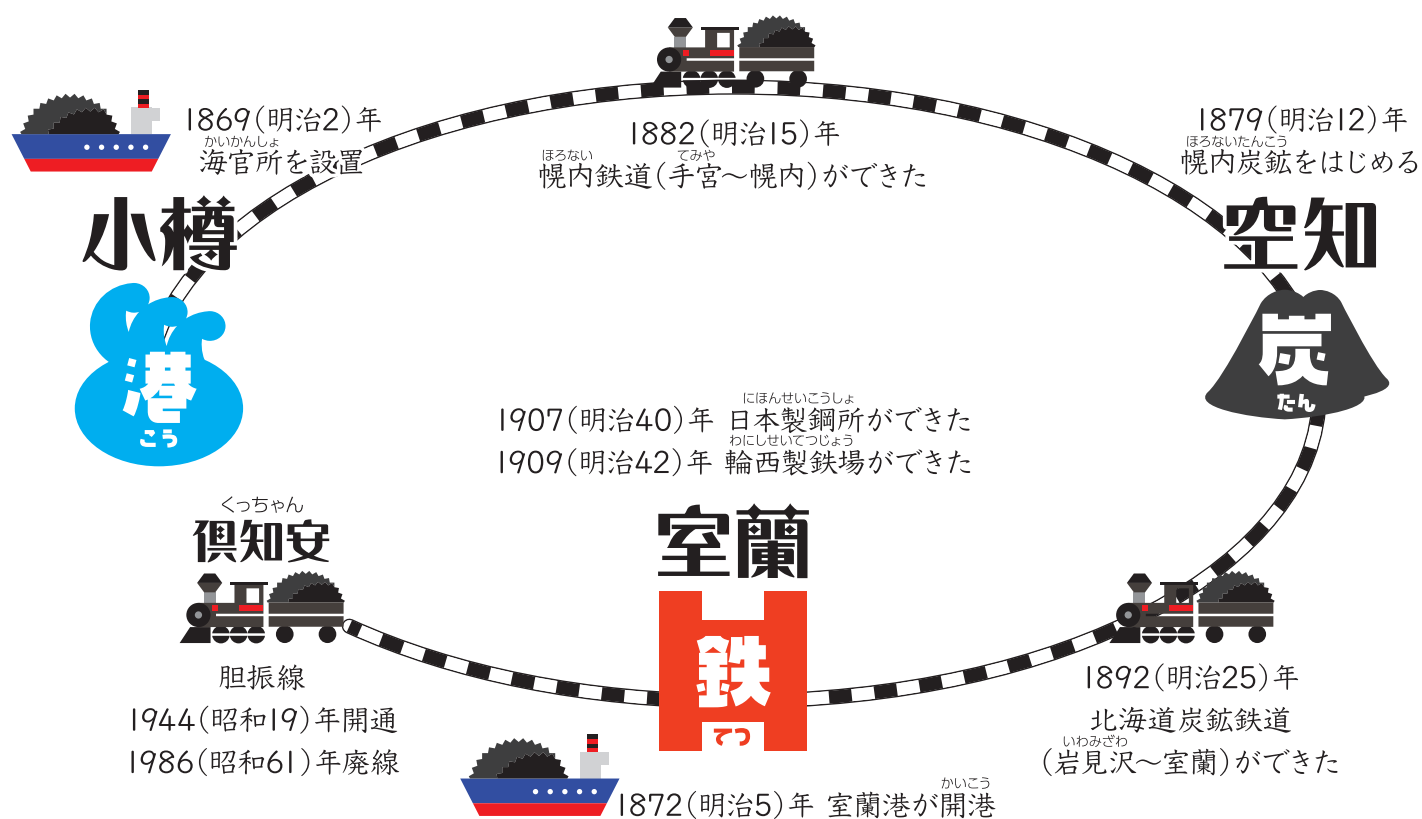
北海道空知総合振興局 地域創生部 地域政策課
〒068-8558 岩見沢市8条西5丁目
TEL 0126-20-0034

「炭鉄港」って、なにかな？

昔、北海道は「蝦夷地」とよばれていました。「北海道」とよばれるようになったのは、およそ150年前、明治時代になってからです。そのころ、北海道に開拓使がおかれ、アメリカやヨーロッパなどの進んだ技術を取り入れて、新しく生まれ変わろうとしていました。

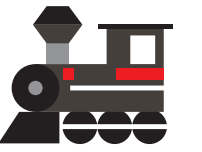
1882(明治15)年、「小樽」と「空知」は鉄道で結ばれました。空知でほられた石炭を運び、小樽港から日本各地へ石炭を運び出すためです。やがて、「室蘭」では空知の石炭を使って鉄をつくるようになりました。

日本遺産「炭鉄港」は、この三つの地域がつながることで、どれほど日本の発展に役立ったのかを伝える取り組みです。それぞれの地域にある歴史的なものを見たり、その時代を知る人の話を聞いたりして、北海道の近代化について調べてみましょう。



もくじ

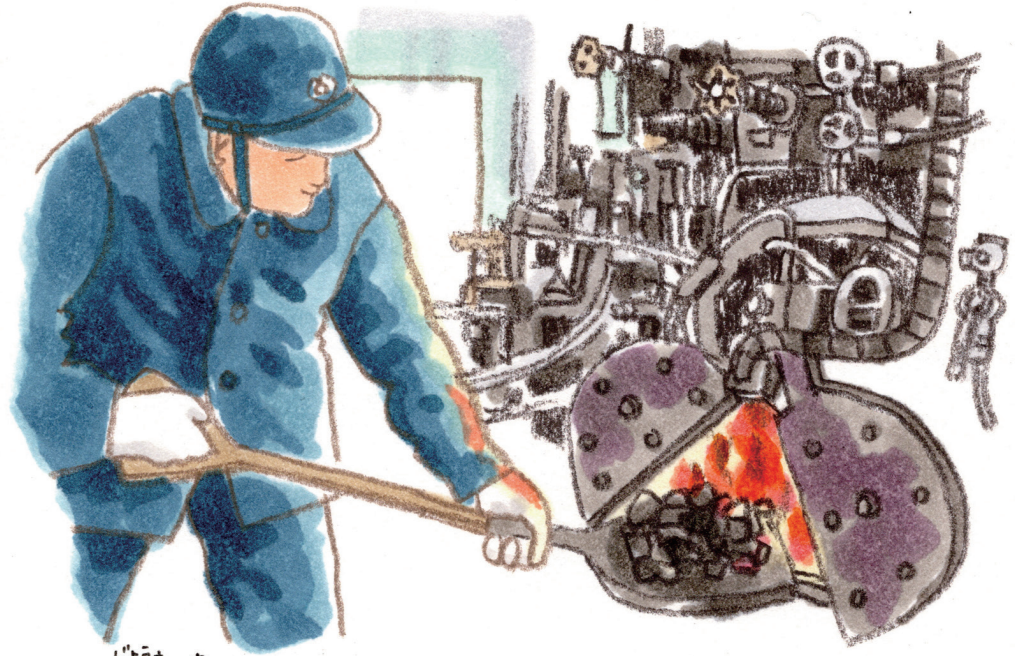
「炭鉄港」って、なにかな？	2
★北海道に鉄道ができたのはなぜ？〈小樽～空知／幌内鉄道〉	4
▲なぜ空知の石炭が必要だったの？	6
▲炭鉱にはどんな暮らしがあったの？	8
▲炭鉱にあったものを見てみよう	10
▲空知の炭鉱街の味	12
★なぜ空知の石炭を室蘭へ運んだの？〈空知～室蘭／北海道炭鉄鉄道〉	14
■鉄は、どうやってつくるのかな？	16
■室蘭には、どんな暮らしがあったの？	18
■鉄のまち室蘭を歩いてみよう	20
■室蘭にしかない食べ物とは？	22
★鉄の原料を運ぶ鉄道もあった？〈室蘭～倶知安／国鉄「胆振線」〉	24
●小樽に港ができたのはなぜ？	26
●小樽にはどんな人が集まってきたの？	28
●歩きまわるほど小樽の歴史が見えてくる	30
●小樽に市場やお菓子屋さんが多いのは？	32
●北海道の開拓と薩摩の人々	34
●もっと知りたい「炭鉄港」	36



鉄道エピソード①〈空知／小樽／幌内鉄道〉

北海道に鉄道ができたのはなぜ？

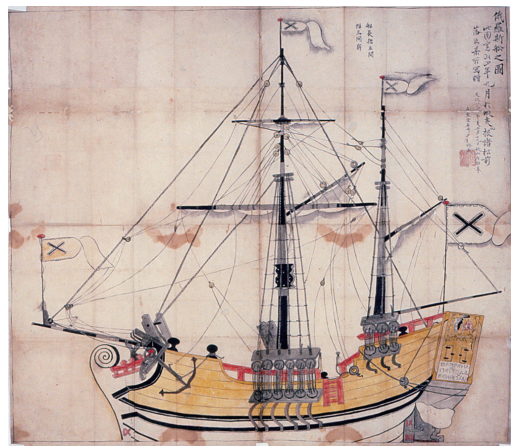
北海道の中心部にある空知は、地下に良質な石炭がたくさんうまっている地域でした。石炭は燃えて高熱を生むので、燃料などに使われていました。一度に大量の石炭を運ぶために、1882(明治15)年、小樽の手宮と三笠の幌内炭鉱を結ぶ幌内鉄道ができました。



蒸気機関車は、石炭を燃やして、水をふいとうさせてできる蒸気で走るんだよ。

◆北海道で石炭がほられるきっかけは？

北海道で石炭が初めてほられたのは江戸時代。きっかけは、アメリカをはじめ、イギリス、フランス、ロシア、オランダと貿易をするようになったからです。それまで日本では、日本人が海外へ行くことも、外国船が港に入ることも禁じていました。箱館(現・函館)港が、横浜、長崎、新潟、神戸とともに、外国と貿易のできる港になると、外国船の燃料に使う石炭を用意する必要があったのです。



箱館港に初めてやって来た外国船
エカテリーナ号(俄羅斯船之圖)

◆石炭を運び出す港は、なぜ小樽に決まったの？

空知でほられた石炭を運ぼうとしても当時はその手段がありませんでした。そこで室蘭まで鉄道をつくる案や、いまの岩見沢付近まで鉄道で運び、その後は石狩川を利用して船で運ぶ案も考えられました。

しかし、室蘭まで工事するにはお金がたくさん必要で、石狩川は雪解け水による氾らんが心配されました。

アメリカからやって来た鉄道の専門家クロフォードは、空知から小樽まで安く、しかも短期間で鉄道ができると提案し、1880(明治13)年には手宮〜札幌間が開通。その後、松本壮一郎が中心となり、1882(明治15)年、幌内鉄道が完成しました。



石炭が積み出されていた時代の小樽。
手宮高架橋(小樽市総合博物館所蔵)

もっと知りたい！「鉄道一小樽市総合博物館本館」

小樽市総合博物館本館には、北海道に鉄道ができる時代の資料をはじめ、蒸気機関車や鉄道施設などが展示されています。

幌内鉄道を走った 蒸気機関車「しづか」号

北海道最初の鉄道「幌内鉄道」を走った蒸気機関車「しづか号」。その後ろに展示されている一等客車「い1号」の内部も見学できます。



蒸気機関車の時代を見てみよう 国指定重要文化財「旧手宮鉄道施設」

「炭鉄港」の中でただ一つの国指定重要文化財。国内に残っている機関車用の車庫では一番古い機関車庫三号、蒸気機関車をのせて方向を変える転車台などがあり、実際に蒸気機関車を動かしています。



小樽市手宮1丁目3-6 TEL:0134-33-2523



炭鉱暮らし・文化

炭鉱にはどんな暮らしがあったの？

明治時代の炭鉱は、集治監(刑務所)に入れられた人たちの労働力にたより、命を落とすほど、とても危険な仕事場でした。昭和初期には機械化も進み、全国各地から集まった多くの労働者が安全に働くことができるよう会社は安全対策をすすめ、快適な生活ができるよう住宅もつくりました。

子どもたちは、炭小屋まで石炭を運んだり、近所の赤ちゃんの子守りをしたり、りっぱな働き手だった。



◆炭住に暮らせば、家族のようなきずなが生まれた。

労働者のために会社が用意した住宅を「炭住」とよんでいました。長屋の炭住一棟は4〜8戸に区切られていました。1970年代までは井戸、トイレ、風呂などは共同で、プライバシーはありませんでしたが、何でも気軽に相談できる、家族のような深いきずなが生まれました。



炭鉱住宅街

◆電気、水道代、家賃も無料だった？

最も深い危険な場所で石炭をほる人は、とても高い給料をもらっていました。電気、水道、家賃、大きな共同浴場も、ほとんど無料でした。炭住街には、食料品や日用雑貨が買える配給所があり、給料が書きこまれたカードを見せると、現金がなくても買い物ができました。



赤平の配給所

◆映画や演劇など札幌より早く公開された。

炭鉱で働く人や家族に娯楽を提供するため、炭鉱の会社は映画館や劇場をつくり、新作の映画や演劇なども札幌より先に上演されていました。

また、炭住街には子どもの数も多く、教室が足りなくなるほどでした。スポーツや芸術活動も盛んで文化的にも豊かな生活ができました。

もっと知りたい！「炭鉱図鑑」

「石炭ストーブ」

石炭を燃やして部屋をあたためるストーブ。この上で料理をすることもあり、お湯をわかし部屋乾燥を防いでいました。子どもたちは炭小屋から石炭を運んだり、ストーブに石炭を入れたり、燃えかす(アク)を捨てたり、親の仕事を手伝いながら、火のあつかいをおぼえました。



博物館に展示されている石炭ストーブ

三笠ではじまった「北海盆唄」

北海道の盆おどりでよく歌われる「北海盆唄」は、三笠の幾春別地区の盆おどり歌を札幌の民謡家が編曲したものです。いまでも、「三笠北海盆おどり」は三笠で最も盛り上がる祭りとして、毎年8月14日、15日に中央公園で開催されています。北海盆唄のルーツの一つは小樽などに伝わる「高島越後踊り」といわれています。

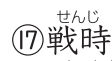


いまの三笠北海盆おどりのようす



【炭鉱】

- ① 空知で初めて確認された
空知川露頭炭層＜赤平市＞
- ② 空知で最初に開かれた
北炭幌内炭鉱音羽坑＜三笠市＞
- ③ 道路や炭鉱をつくる囚人たちがいた
樺戸集治監本庁舎(月形樺戸博物館)
空知集治監典獄官舎レンガ煙突
＜月形町・三笠市＞
- ④ 道天然記念物でもある
夕張の石炭大露頭「夕張24尺層」
＜夕張市＞
- ⑤ 炭鉱マンが好きな酒づくりをした
小林酒造建造物群＜栗山町＞
- ⑥ 赤レンガの飾りが美しい
旧北炭夕張炭鉱天龍坑＜夕張市＞
- ⑦ 鉄道で栄えた時代の建物を再利用した
炭鉱の記憶マネジメントセンター石蔵
＜岩見沢市＞
- ⑧ 天皇や大事な客が宿泊した
夕張鹿鳴館(旧北炭鹿ノ谷倶楽部)
＜夕張市＞
- ⑨ 炭鉱で使う電力を調整していた
幌内変電所＜三笠市＞
- ⑩ 残っている立坑で道内最古の
北炭幾春別炭鉱錦立坑櫓＜三笠市＞
- ⑪ 道内で2番目に古い
三菱美唄炭鉱竪坑櫓＜美唄市＞
- ⑫ 炭鉱で使う電力をつくった
旧北炭滝ノ上水力発電所＜夕張市＞
- ⑬ メタンガスを利用した
北炭新幌内礮坑口＜三笠市＞
- ⑭ 明治時代の坑道を利用した
旧北炭夕張炭鉱模擬坑道
(夕張市石炭博物館)＜夕張市＞
- ⑮ 炭鉱で使う電力をつくっていた
旧北炭清水沢水力発電所＜夕張市＞
- ⑯ ブリ山の階段が日本一の
北炭赤間炭鉱スリ山＜赤平市＞



【炭鉱】

- ⑰ 戦時中につくられた
採炭救国坑夫の像＜夕張市＞
- ⑱ 働く条件の向上を求めた
人民裁判事件記録画＜美唄市＞
- ⑲ 炭鉱の子どもたちが通った
旧栄小学校
(安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄)
＜美唄市＞
- ⑳ すべてレンガでつくられた
星槎大学(旧頼城小学校)校舎及び体育館
＜芦別市＞
- ㉑ 1956年に建てられたY字型の
三笠市役所庁舎＜三笠市＞
- ㉒ ドイツの技術を導入した
住友奔別炭鉱立坑櫓・周辺施設＜三笠市＞
- ㉓ 1日2回ガイド付きで見学できる
住友赤平炭鉱立坑櫓・周辺施設＜赤平市＞



【鉄道】

- ㉔ 車両の組み立てや修理をしていた
旧北海道炭礦鉄道岩見沢工場
(岩見沢レールセンター)＜岩見沢市＞
- ㉕ 石炭を運んでいた万字線の
朝日駅舎＜岩見沢市＞
- ㉖ 石炭を運ぶ中継地となった
岩見沢操車場跡＜岩見沢市＞
- ㉗ 唐松炭鉱の石炭を運び出した
唐松駅舎＜三笠市＞
- ㉘ 昭和炭鉱で使われていたドイツ製の
クラス15号蒸気機関車＜沼田町＞
- ㉙ 小樽や追分で石炭を運んでいた
蒸気機関車D51 320号機＜安平町＞
- ㉚ 石炭を運ぶ専用列車と橋が残る
旧三井芦別鉄道炭山川橋梁＜芦別市＞
- ㉛ 美唄鉄道東明駅舎と石炭を運び出したSL
4110形式十輪連結タンク機関車2号
＜美唄市＞

炭鉄港おでかけマップ

SORACHI

〈空知〉



炭鉱〈散策・体験スポット〉

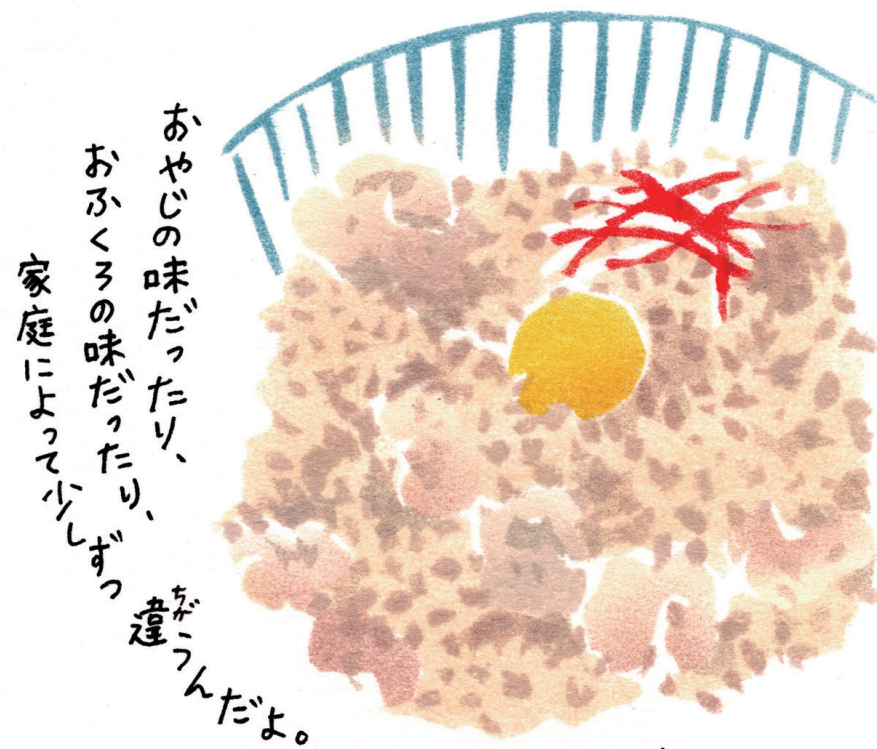
炭鉱にあつたものを見てみよう。

空知には、炭鉱や鉄道あとがたくさん残っています。石炭を生産していた建物や蒸気機関車が見られるスポット、歴史を学べる博物館や施設に出かけてみましょう。



空知の炭鉱街の味

空知の各地には、炭鉱で働く人が
「明日の活力」のために食べた料理があります。



おやじの味だったり、
おふくろの味だったり、
違ふんだよ。



ニワトリのすべてを食べつくす
とり料理(美唄市)
美唄の郷土料理「とりめし」は、108年ほど
前、中村地区の農民たちが作りはじめました。
石狩川が氾らんするたびに洪水の被害を受け
たため、農民たちは少しでも暮らしを楽にしよ
うとニワトリをかいはじめました。遠方からの
客や祝いごとがあると、大切に育てた米とニワ
トリの肉や内臓をたきこみ、栄養満点の「とり
めし」で、もてなしたのです。いまでも家庭の味
として、その味は代々受けつがれています。
また、美唄の焼き鳥は、とり肉と内臓や皮
など、いろいろな
部位を一本の串
にさしているの
が特徴です。栗
山町の小林酒
造の酒とともに
に、炭鉱で働く人た
ちに、とても好まれて
いました。



小林酒造(栗山町)

秋田から伝わった馬肉料理 なんこ(歌志内市・三笠市)

馬の腸の料理「なんこ」は、もともとは
秋田県の郷土料理。鉾山で働く人たちが
肺病を予防するために食べていたもの
で、明治、大正時代に秋田から移住した
炭鉱労働者が北海道の炭鉱に伝えまし
た。いまでも歌志内や三笠で食べることが
できます。



「なんこ」は馬の腸を小さく切り、玉ね
ぎ、みそ、さとうを加えて鍋に入れ、石炭
ストーブの上
で一日中コト
コト煮込んで
つくります。い
までも暮れに
なると、正月用
に「なんこ」を
肉店に注文す
る家庭が多い
のです。

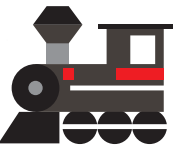


豚のホルモン、豆腐、野菜をみそベースの汁で煮込んだ
「がんがん鍋」(赤平市)

旧満州からの引揚者が作った ガタタン(芦別市)

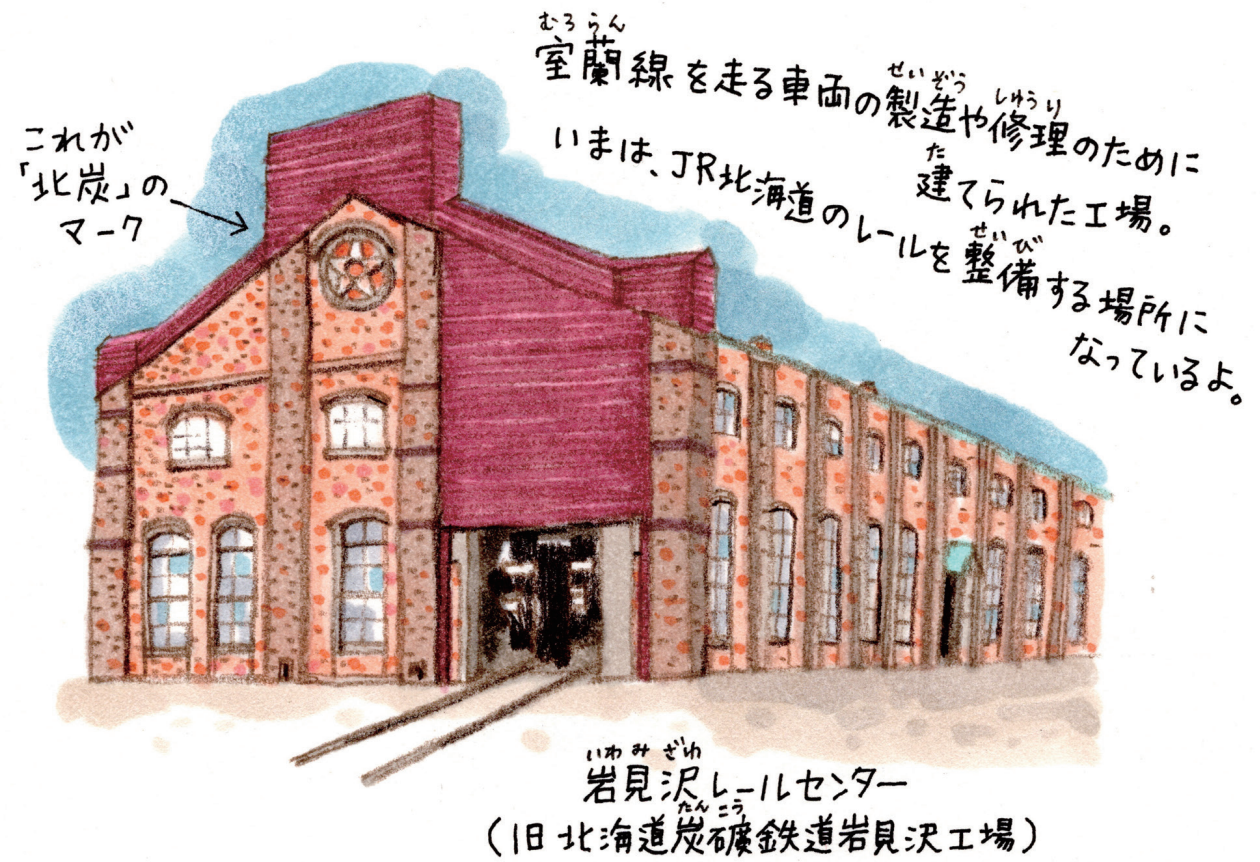
ガタタンとは、とろみのある「とんこ
つ」や「とりがら」スープに、だんご、豚肉、
イカ、さまざまな野菜、卵など、具がたく
さん入った栄養たっぷりのスープで、炭
鉱で働く人に人気のあった食べ物です。
戦後、旧満州から引き揚げて来た人が、
中国の鍋料理「ガータタン」を参考に、自
分が営む中華料理店で出したのがはじま
りです。この店はもうありませんが、その
味を覚えてい
た人が復活さ
せ、いまでは、
いろいろな店
で食べられる、
芦別の名物料
理になりました。





鉄道エピソード②〈空知／室蘭／北海道炭鉱鉄道〉

なぜ空知の石炭を室蘭へ運んだの？



1882(明治15)年、幌内炭鉱の石炭を小樽へ運ぶために鉄道が開通したとき、岩見沢にはまだ駅もありませんでした。やがて空知のあちこちに炭鉱ができていくと、岩見沢は石炭を各地から集めて運び出す鉄道の中継地となりました。やがて空知の石炭は室蘭へ運ばれ道外へ、また鉄をつくるためにも使用されました。

◆岩見沢が鉄道の中継地になったのは？

岩見沢駅ができたころは、乗る人や荷物があるとただけ列車がとまる駅でした。やがて、北海道炭坑鉄道会社(北炭)は、夕張炭鉱や歌志内の空知炭鉱を開発しました。石炭を運ぶために、歌志内線(岩見沢―砂川―歌志内)、室蘭線(岩見沢―室蘭)、夕張線(追分―夕張)が開通すると、岩見沢は道央の鉄道を結ぶ中継地となりました。



石炭を積んで夕張線を走る「D51 320」

◆なぜ、室蘭に石炭を運ぶ必要があったの？

室蘭に石炭が運ばれるようになったのは、道外へ大量に輸送するためです。産炭地から平らな胆振の海岸を通って鉄道がしかれ、室蘭は石炭積み出し港として発展しました。

さらに、1907(明治40)年に日本製鋼所、その2年後に輪西製鉄場ができ、室蘭は「鉄のまち」として歩みはじめます。鉄や鋼をつくる原料炭として、空知の良質な石炭が必要になったのです。



室蘭を鉄のまちにした北炭の井上角五郎

◆石炭を運ぶ鉄道が室蘭港を発展させた

1872(明治5)年に港が開かれた室蘭は、函館から札幌を結ぶ「札幌本道」の重要な中継地でした。1892(明治25)年、岩見沢―室蘭間の鉄道ができたことで、室蘭港は、石炭の積み出しを開始しました。やがて、小樽港と同じように、道外や外国向けの石炭を輸出する港へと大きく発展しました。

もっと知りたい！「鉄道―室蘭市旧室蘭駅舎」

道内最古の木造駅舎「旧室蘭駅舎」

1912(明治45)年に建てられた旧室蘭駅舎は、道内最古の木造駅舎です。明治の洋風建築のおもかげを残す屋根や白壁、外回りに「がんぎ」とよばれる雪よけ屋根があり、国の登録有形文化財に登録されています。いまは、観光案内所として使われ、当時、鉄道で使われていた道具や備品、写真なども展示されています。



石炭を運んだ蒸気機関車「D51 560号」

1940(昭和15)年、苗穂工場でつくられた蒸気機関車。1974(昭和49)年まで道内各地を走っていました。2019(令和元)年、室蘭市青少年科学館で展示されていたものが旧室蘭駅舎の隣に移設されました。



室蘭市海岸町1丁目5-1 TEL:0143-23-0102(室蘭観光協会)

(室蘭観光協会提供)

鉄は、どうやってつくるのかな？

室蘭の西に広がる噴火湾一帯の土地には、鉄の原料となる「砂鉄」がうまっています。また、倶知安方面には鉄の原料となる鉄鉱石の鉱山もありました。空知の石炭を燃料にえば、室蘭を鉄の産地にできると考えられました。

◆日本に古くからある「たたら製鉄」とは？

「たたら製鉄」とは、千年以上の歴史をもつ日本ならではの鉄をつくる技術です。昔から「ふいご」という空気を送る道具で木炭を燃やし、とかした砂鉄から鉄分を取り出していました。その鉄から強い鋼をつくり、日本刀、刃物、工具などをつくっていました。



「たたら製鉄」の実演

夏、工場内は40~50%の暑さになることもあるよ。



もっと知りたい！「鉄鋼図鑑」

「砂鉄」

室蘭のイタンキ浜では、砂鉄がとれます。砂浜にじしゃくを近づけると、黒くて細かい砂鉄が、くっつきます。砂鉄はマグマにふくまれているので、室蘭が火山性の地形であることがわかります。砂鉄は、鉄の原料として古くから使われていましたが、室蘭の製鉄所ではうまく使えませんでした。



「鉄鉱石」

鉄鉱石は、鉄の原料となる石で、種類もいろいろあります。鉄鉱石の品質は、ふくまれる鉄分によって左右されます。地球の中心部分はほとんどが鉄でできており、海底には鉄鉱石が限りなくあるといわれています。いまのような溶鉱炉で鉄をつくるようになってから、この赤鉄鉱が主に使われています。



◆いま、鉄や鋼はどのようにつくられるの？

鉄をつくるには、鉄鉱石、石灰石、コークス（石炭を蒸し焼きにしたもの）が必要です。まず、品質が均一になるように鉄鉱石をまぜ、石灰石を加えて焼きかためます。それを溶鉱炉に入れ、コークスを燃やして、高温で鉄鉱石をとくして銑鉄をとりだします。その後の精錬工程で炭素や不純物を取りのぞいたものが鋼です。



50年前くらいの炉前の作業。熱くて塩をなめながら仕事をしていました



ドロドロにとけた銑鉄

もっと知りたい！「鉄のまち」図鑑

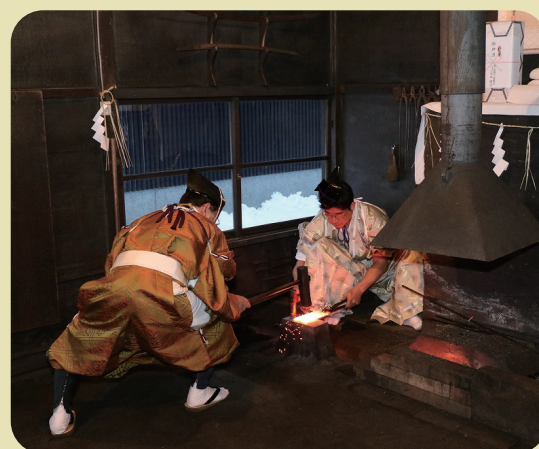
鍛冶屋の道具「ふきさしふいご」

長方形の木箱に取りつけたピストンで風の出し入れを行っていた「ふきさしふいご」。たたら師や鍛冶屋たちが、このふいごをかついで各地を渡り歩いていたそうです。室蘭市民俗資料館には、室蘭の歴史や生活を伝える資料が展示されています。



日本刀をつくる刀匠がいる「瑞泉鍛刀所」

日本の伝統である日本刀をつくる技術を保存するため、1918（大正7）年、日本製鋼所室蘭製作所に瑞泉鍛刀所が建てられました。日本刀の原料から刀に仕上げていく刀匠は、いま5代目です。



「坂」は室蘭の生活の中で、日常の風景。坂の名前から、地域の歴史やそこで起きた出来事がわかってくるよ。



炭鉱と同じように、鉄のまちも24時間休むことがありませんでした。機械を止めることがなかった。鉄鋼マンたちは、朝方、昼方、夜方と交代して働いたのです。製鉄所で働く人やその家族がたくさん住んでいたの、商店や映画館もいっぱいありました。

鉄鋼へ暮らし・文化 室蘭には、どんな暮らしがあつたの？

◆50年ほど前、北海道で最も人口密度が高かった。

鉄鋼業が最も盛んだった50年ほど前、室蘭は約18万人が暮らす、道内で最も人口密度の高いまちでした。小学生は多いと、きで2万3千人もいて、1600人以上が通うマンモス小学校もありました。飲食店も働く人の時間に合わせて営業していました。



アーケードのにぎわい（室蘭市提供）

◆室蘭に職人が多かったのはなぜ？

室蘭には、着物などに家紋をつける上絵師、重要文化財の修復を手がける表具師、江戸時代から伝わる工芸菓子職人など、日本の伝統を守る職人たちが、たくさん集まりました。鉄鋼業でうるおった豊かな暮らしや近くにあった登別温泉街に、職人たちはなくてはならない存在でした。



上絵師の仕事

◆戦時中、室蘭に攻撃が集中した理由？

戦時中、室蘭の製鋼所では、大砲など国産兵器をつくっていました。そのため、米軍からの攻撃的になり、鉄道、市街地、港などが空襲を受け、戦艦から860発もの砲弾が撃ち込まれ、たった2日間で、軍関係者以外に500人近い死傷者が出ました。

炭鉄港おでかけマップ MURORAN 〈室蘭〉



【鉄鋼】

- ①工場の電力をつくっていた1909年築の旧火力発電所(日本製鋼所 M&E(株))
- ②室蘭で初めてできた鉄でつくった恵比寿・大黒天像
- ③大正天皇が皇太子時代に宿泊した瑞泉閣
- ④日本で最初につくられた1918年製の日本製鋼所室蘭製作所製造 複葉機エンジン「室0号」
- ⑤室蘭ならではのながめと夜景が広がる工場景観と企業城下町のまちなみ



【港湾】

- ⑥1915年に建てられた旧三菱合資会社室蘭出張所
- ⑦1926年に建てられた山荘風の旧北炭室蘭海員倶楽部



【鉄道】

- ⑧1912年築の道内最古の木造駅舎室蘭市旧室蘭駅舎

※①、③は、一般の方は見学できません。 ※②は、室蘭市室蘭市民族資料館で見学できます。

※④、⑦は、事前に問い合わせが必要です。

◆鉄のもののづくり体験 「輪西八条アトリエ」

鉄の基本を学びながら、キーホルダーやマグネットなど、鉄を原料としたものづくりを小学生以上から体験できるアトリエ。元鉄鋼マンが「孫に室蘭らしい体験をさせたい」と家族連れで参加するケースも多く、鉄が変化していくようすに、大人たちも夢中になります。



問い合わせ先／TEL:0143-84-5510(ノールドデザイン)



鉄鋼〈散策・体験スポット〉

鉄のまち室蘭を 歩いてみよう。

室蘭には、鉄鋼マンたちが誇りにしている仕事場や景色がいっぱいあります。歴史的に貴重な建物や工場を見学したり、鉄づくりをしたり、室蘭ならではの体験をしてみよう。

体験したい！「鉄の授業」

◆たたら製鉄を伝える 「室蘭登別たたら会」

昔、製鉄所で働いていた鉄鋼マンが、日本伝統の「たたら製鉄」を伝えようと、小学校の課外授業やイベントでの体験教室を行っています。室蘭のイタンキ浜で原料となる砂鉄を集め、レンガと粘土で炉をつくり、木炭と砂鉄を入れて鉄ができる工程を学ぶことができます。



問い合わせ先／TEL:0143-85-1179



鉄鋼食

室蘭にしかない食べ物は何？

鉄鋼マンが愛した味、室蘭だから生まれた味、そのおいしさには理由がありました。

やきとりなのになぜか豚肉

室蘭やきとり

日中戦争がはじまった昭和初期、食糧増産のために全国で養豚がすすめられました。食べるものが不足していた戦後は、屋台などで豚肉やモツ（内臓）が安く食べられるようになりました。

当時は、豚のほかに野鳥も串焼きにしていたことから、名前は「やきとり」のまま、やがて豚肉と玉ねぎを串焼きにして、洋がらしをつける食べ方が定着していききました。



室蘭やきとりは、洋がらしは欠かせない。おでんやトンカツ用をやきとりにもつけたのが始まりだとか。



道内では室蘭だけで生産

うずらのたまご

南にある函館よりも1月の平均気温が高く、夏と冬の寒暖差も少ない室蘭は、うずらの飼育に向いています。こだわりのエサを与えてうずらを育て、健康的なたまごを生産し、加工や販売まで、一つの会社が行っているのが菌が入りこむこともなく、安全性が高く、味も濃厚なおいし

いたまごになるのです。北海道で売られてい

る生のう

ずらのた

まごは、

100%

室蘭産で

す。

アツアツの

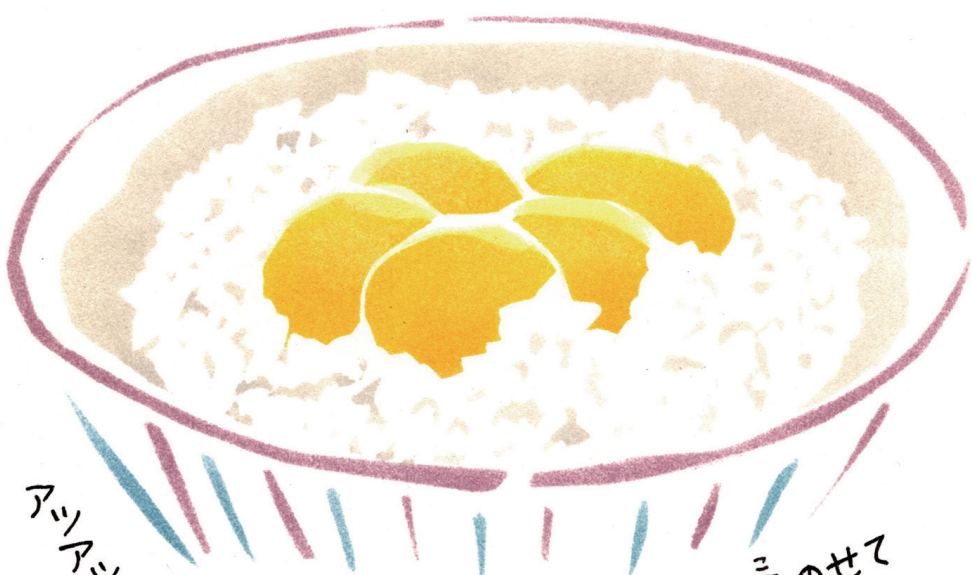
ごはんは、

しょうゆを

たっぷり

た。ニワトリのたまごより濃厚で

栄養もあるんだよ。



室蘭でしかとれない

ヤン昆布

ヤン昆布は、波が荒い室蘭の海でとれ、岸壁に打ちつけられて傷つくため、だし昆布としては使い物にならず、とろろ昆布などに加工されていました。ヤンとはアイヌ語で「普通の」を意味しますが、ほかの昆布と比べて栄養素が豊富にふくま

れているとい

われています

す。

人気の駅弁

「母恋めし」の

ホッキの炊き

込みごはんは

も、味付きう

ずらたまごの

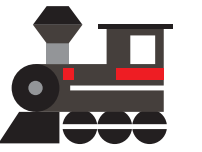
液にも、この

ヤン昆布の

だしが使われ

ています。





鉄道エピソード③へ室蘭／倶知安／国鉄「胆振線」

鉄の原料を運ぶ鉄道もあつた？

北海道を豊かにするためには、ものを運ぶ道路や鉄道、港を整備する必要がありました。まずは石炭を運ぶために空知と小樽が鉄道で結ばれ、やがて空知と室蘭の間にも鉄道ができました。昭和初期から10年代にかけて、室蘭に近い鉱山から鉄の原料である「鉄鉱石」を運ぶ鉄道もできました。



◆有珠山の噴火で中断した鉄道計画。

室蘭に日本製鋼所ができるのと、室蘭から伊達、蛇田、真狩を通って倶知安へつながる胆振鉄道の計画がはじまりました。倶知安周辺の鉱山から、鉄の原料「鉄鉱石」を運ぶためです。ところが、有珠山の大噴火があり、計画は中断され、室蘭から長万部へと走る「長輪線」が先に完成しました。

◆鉄鉱石を運ぶための胆振線とは？

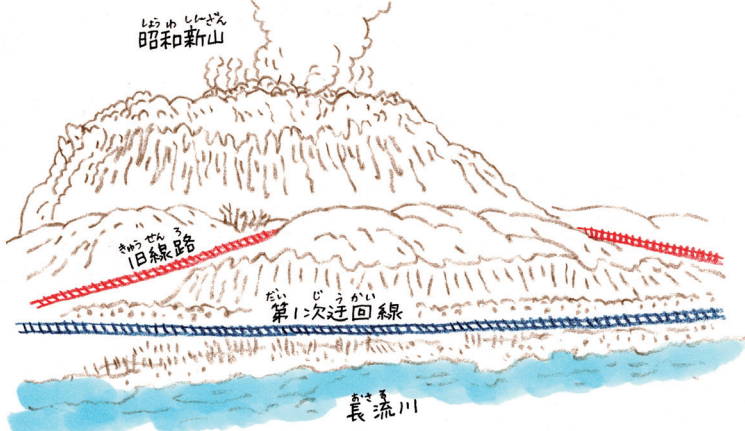
室蘭の製鉄所で使う鉄鉱石を運ぶための「胆振縦貫鉄道」は、まず倶知安と京極が結ばれ、京極から喜茂別まで鉄道がのび、やっと長輪線（室蘭／長万部）の伊達紋別までつながり、短い

距離と時間で鉄鉱石を運べるようになりました。1944（昭和19）年、国鉄「胆振線」となり、1986（昭和61）年になくなりました。

◆昭和新山が大きくなる

たびに移動した鉄道。

胆振線が通っていた洞爺湖付近は、昔から火山活動がくりかえされていた地域です。昭和新山は、もともと畑だったところが、火山活動により地面が少しずつ盛り上がり、1944（昭和19）年に誕生した山です。そのすぐ横を走っていた胆振線は、大地が盛り上がるたびに、何度も長流川の方へ移動しなければならいませんでした。



昭和新山の頂上とふもとの中間あたりを走っていた胆振線



サイクリングロードになっている胆振線の線路あと（伊達市）

もっと知りたい！「鉄道一胆振線のあと」

胆振線が走っていたまちには、鉄鉱石を運んでいた蒸気機関車や鉄道のあとが残っています。野外博物館として、そのあとをめぐってみましょう。

昭和新山鉄橋遺構公園(壮瞥町)と「平成ふるさとの道公園」(伊達市大滝区)

昭和新山のふもとに、胆振線の鉄橋あとが残っています。これは、火山活動によって地面といっしょに鉄橋も持ち上げられたあかしで、国道から階段100段ほど上がった高台にあります。また、旧大滝村にあった徳瞬瞥鉱山からも、室蘭で使う鉄鉱石を運んでいました。現在、駅や線路あと地は「平成ふるさとの道公園」としてサイクリングロードとなり、近くには高さ10mほどある橋のあとが残っています。





港湾へ基礎・歴史

小樽に港ができたのはなぜ？

江戸時代、蝦夷地はニシン漁で栄えていました。ニシンは肥料として、おもに西日本で使われ、大坂（現・大阪）から北前船が日本海を回って商売をしていました。明治になると、北前船は小樽にも来はじめ、開拓に必要な人や物を運び入れ、道内の生産物を運び出す重要な港になりました。



◆小樽港から石炭はどこへ運ばれていたの？

1869（明治2）年、小樽に手宮海官所（税関、海上保安、海運局など港湾に関する役場）ができ、商港としての歩みが始まりました。1882（明治15）年、手宮（小樽）〜幌内（三笠）間に鉄道ができると、小樽港は、空知の石炭や農作物を積み出す港として発展していきまし。小樽から運ばれた石炭は、全国各地で近代化に使われ、蒸気機関車や機械を動かす重要なエネルギーとして日本の発展を支えたのです。



明治13年、幌内鉄道の試運転の風景。
弁慶号が入船陸橋を走っている
（小樽市総合博物館所蔵）

もっと知りたい！「港湾一博物館・資料コーナー」

明治時代のまち並みを再現した「小樽市総合博物館運河館」

明治時代に建てられた石造りの倉庫を利用した運河館。館内には、明治時代の小樽のまち並みを再現し、小樽の歴史や自然に関する資料が展示されています。

小樽市色内2丁目1-20 TEL: 0134-22-1258



小樽港の歴史を学べる「小樽港湾事務所みなとの資料コーナー」

小樽港建設の歴史をふりかえる貴重な資料、写真、模型などを展示しています。また、建設に関わった人たちの知恵や努力をビデオ上映で伝えています

小樽市築港2-2 TEL: 0134-22-6131



◆小樽に防波堤ができたのは？

小樽港をより安全にするためには、風や波から船を守る防波堤が必要でした。その建築をまかされたのが、札幌農学校（いまの北海道大学）を卒業し、アメリカやドイツで土木技術を学んだ廣井勇です。廣井は、冬の高波にもたえられコンクリートの試験をくりかえし、1897（明治30）年から11年もかけて、全長1289mの「北防波堤」を完成。日本初のコンクリート製外洋防波堤で、110年以上たったいまも使われています。

◆国際貿易港として栄えはじめたのは？

その後、南防波堤と島防波堤の新築、北防波堤をのぼす工事など、最新技術により整備された小樽港は、国際的な貿易港として発展していきます。大正〜昭和初期には、ヨーロッパ、南樺太、中国北東部との貿易も盛んになっていきました。



昭和初期の色内銀行街（小樽市総合博物館所蔵）



港湾へ暮らし・文化

小樽にはどんな人が集まってきたの？

明治政府は、本州方面から北海道へ移動する制限をなくしました。小樽で成功したいと夢を持って移り住んだ人も多く、小樽商人や職人も増えていきました。北海道の開拓に欠かせない港まちだった小樽は、そのころ、札幌より人口が多く、北海道で使うお金の取り引きをする銀行もたくさんできました。

◆港にはどんな仕事があったの？

港で働く人は、船の乗組員だけではなく、荷物を小舟で岸まで運ぶ人、小舟の荷物を陸にあげ倉庫へ入れる人、乗組員や乗客を小舟で送迎する人、水先案内人や荷物を管理する人など、さまざまな仕事がありました。

◆石造りの倉庫をつくったのは？

北前船の船主たちは、北海道で売るための酒、米、塩、さとう、衣類、紙などをはじめ、小樽から



「やましち」の印がある旧大家倉庫



もっと知りたい！「小樽建物図鑑」

小樽の印

小樽運河沿いの倉庫群を観察してみると、外壁にマークのようなものがあります。これは、店を見分けるための「印」です。のれん、働く人が着る半てん、道具にも入っていました。「いじろし」、「やまいち」、「りゅうご」、「いちうろこ」など、いろいろな印を見比べながら、まち歩きを楽しみましょう。

国指定重要文化財 「旧日本郵船株式会社小樽支店」

1906（明治39）年に建てられた旧日本郵船株式会社小樽支店。海運業が栄えていた時代を物語る商都小樽を代表する文化遺産です。「小樽の歩みと日本郵船」をテーマに、明治・大正期の海運を中心とした小樽の発展と日本郵船に関する資料を展示しています。

※保存修理工事のため、2022年3月まで休館予定（期間が変更になる場合があります）

◆さまざまな職人がいた坂道

小樽には「職人坂」とよばれる坂があり、昔は両脇に仏壇、家具、建具、塗り師、金具師など、さまざまな職人の仕事場が並んでいました。また、入船町周辺は、縫製工場や繊維問屋など、繊維産業が盛んな地域でした。漁をする網の目印となるガラス製の「うき玉」も、小樽のガラス職人の技から生まれています。



ガラスのうき玉

出荷する道内各地の農産物を一時的に保管できる石造りの倉庫を建て、たくさんの商品をあずかっていました。内側の柱や梁は木材で、外壁は札幌や小樽でとれる軟石が使われ、夏は涼しく、冬は暖かく、防火性にも優れています。



明治時代の小樽倉庫群
(小樽市総合博物館所蔵)

体験したい！「港まちの授業一小樽」



問い合わせ先／TEL:0134-25-1415

◆ガラスのうき玉づくり
「浅原硝子製造所」
小樽にあるガラス工場の中で、最も古い歴史をもつ浅原硝子製造所。漁網につけていた木や竹の「うき」に代わるものとして初代がガラスのうき玉を考えました。予約をすれば、うき玉づくり体験もできます。



問い合わせ先／0134-54-3280(小樽観光ネットワーク)

◆小樽で印めぐり
小樽運河沿いの倉庫に残る「印」をガイド付きで見えてまわり、その歴史を学びます。

炭鉄港おでかけマップ OTARU 〈小樽〉



【港湾】

- ① 110年以上たったいまも現役の小樽港北防波堤
- ② 石炭を積み出す機械があった北炭ローダー基礎
- ③ 大手銀行や石炭の商社建築が残る色内銀行街
(旧三井物産及び旧三菱商事小樽支店)



【鉄道】

- ④ かつての幌内鉄道あとを歩く
手宮線跡及び附属施設
- ⑤ 国指定重要文化財旧手宮鉄道施設
- ⑥ 行商人の歴史もわかる小樽中央市場



港湾へ散策・体験スポット
小樽には、小樽運河や明治時代に建てられた建築物など、観光スポットがたくさんあります。小樽に港ができた歴史を実感するためにも、いつもとは違うアンテナをはって歩いてみましょう。

歩きまわるほど小樽の歴史が見えてくる。



港灣へ食

小樽に市場やお菓子屋さんが多いのは？

港で働く人たちが満たしたあの味、

小樽ならではの市場の味。

ガンガン部隊が支えた

小樽の市場

小樽に市場ができたのは明治時代ですが、太平洋戦争中に、ほとんどの市場がなくなりました。現在、残っているのは戦後にできた市場が多く、満州（中国東北部）や樺太（サハリン）から日本に戻って来た人が中心となって建てたのが「中央市場」です。当時、小樽の市場を支えたのは、ブリキで作った大きな箱に鮮魚や乾物、お菓子や日用品などを詰めて行商に歩いた「ガンガン部隊」でした。行商人は夜明け前から市場で商品を仕入れ、鉄道で岩見沢、美唄、滝川などの産炭地へ、近くの札幌や後志周辺へと商品を売り歩いたのです。地方からも野菜などを背負った行商人が小樽へやって来たそうです。小樽の市場をめぐり、どこでとれた食材なのか、地域ならではの食べ方も聞いてみましょう。

港で働く男たちに愛された

小樽あんかけ焼きそば

それほど歴史は古くありませんが、小樽で「あんかけ焼きそば」が食べられるようになったのは、1955（昭和30）年ころからです。昭和初期、東京や京都からやって来た料理人たちが伝えた味で、腹持ちがよく、安く食べられる料理として市内の食堂や喫茶店にも広がりしました。



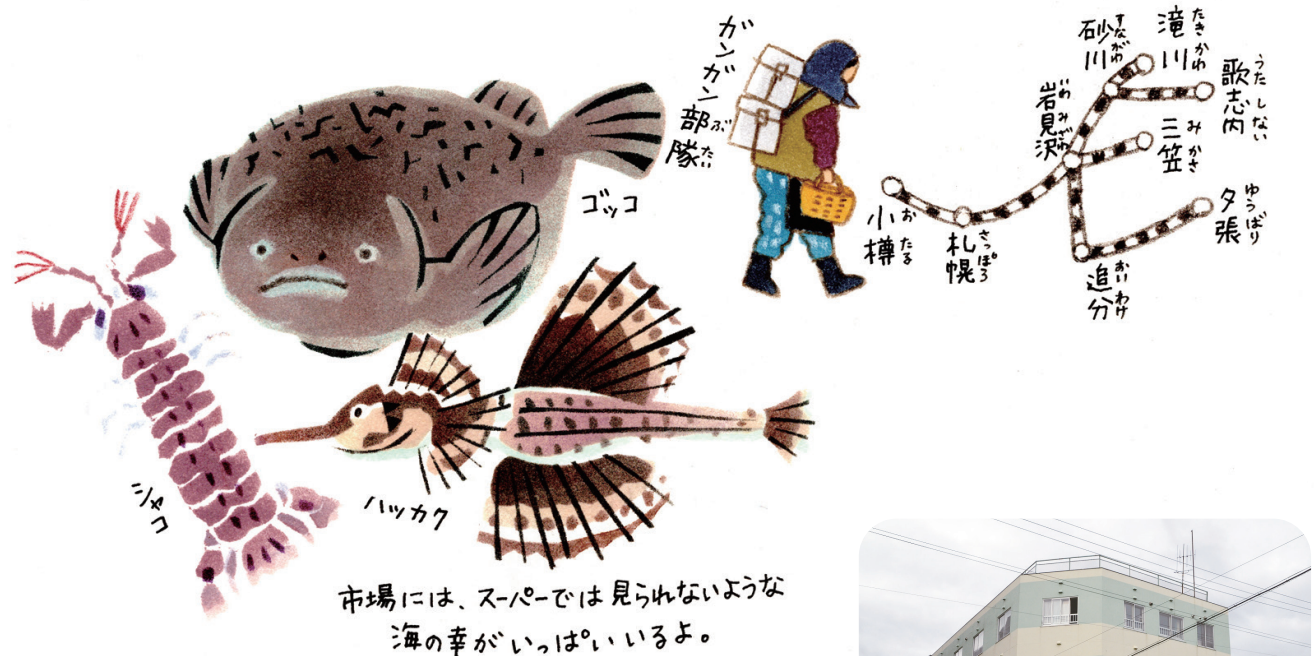
労働者たちの甘いおやつ

もち菓子・ぱんじゅう

明治のはじめ、港で働く労働者から喜ばれたのが、手軽に食べられ、腹持ちのよい、もちにさとうをまぜた「すあま」のようなもち菓子でした。米、小豆、さとうなどの原料が集まる小樽に、北陸や東北、道南の松前や江差などの菓子職人が移り住むほど、港は栄えていました。また、東京から入ってきた「ぱんじゅう」は少しぜいたくなおやつとして親しまれ、今も小樽を代表する菓子として人気です。小樽から産炭地にも広がり、夕張にも昔ながらのぱんじゅう屋さんが残っています。



パンのような皮の中に小豆あんがたっぷりの「ぱんじゅう」(桑田屋提供)



いまの中央市場

北海道の開拓と薩摩の人々

明治政府は、日本の新天地として北海道を開拓できるように、「開拓使」という役所をつくりました。外国から優れた技術や知識を持つ専門家を招いて道路や鉄道を整備したり、近代的な農業をはじめたり、田畑を耕しながら防衛する「屯田兵」という制度もつくりました。

全国各地からたくさんの方が北海道の開拓のためにやって来ました。北海道へ移り住んだ人が一番多いのは青森県、炭鉱労働者では秋田県、農業では富山県、石川県から来た人が多くいました。こうした道外から来た人たちが、ずっと前から北海道で暮らしていたアイヌの人たちの力がいまの北海道につながっています。そして、薩摩とのつながりもありました。江戸時代の薩摩藩とはいまの鹿児島県です。日本最南端の藩で、ロシア、イギリス、フランス、アメリカなどの船が近くにやって来るたび、日本も外国と対等な力を持たなければいけないと考えました。大きな船やガラス製品などをつくる近代的な工場を薩摩に建てた経験をいかし、北海道の開拓のためにも役立てようと思いました。



島津 齊彬（1809～1858）
第11代薩摩藩主 島津家第28代当主
造船、大砲・ガラス製造や紡績などの
日本初の近代工場群「集成館」を
鹿児島につくりました。

〈北海道と関わりの深い薩摩人〉



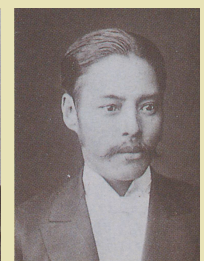
黒田 清隆（1840～1900）
第3代目の北海道開拓長官をつとめ、北海道開拓の指揮をとりました。



西郷 従道（1843～1902）
西郷隆盛の弟で、4代目の北海道開拓長官となりました。



堀 基（1844～1912）
開拓使の役人をつとめた後、北海道炭鉄道をつくりました。



村橋 久成（1840～1892）
開拓使に入り、麦酒製造所（サツポロビールの前身）をつくるために働きました。



永山 武四郎（1837～1904）
屯田兵制度を取り入れ、のちに第2代目の北海道長官をつとめました。



調所 広文（1840～1911）
札幌農学校（いまの北海道大学）の初代校長をつとめました。